

令和2年度農作物有害動植物発生予察情報 特殊報第3号

令和2年11月25日
山形県病害虫防除所

- 1 病害虫名 トルコギキョウ斑点病
- 2 作物名 トルコギキョウ
- 3 病原名 *Pseudocercospora nepheloides* (= *P. eustomatis*)
- 4 発生の経緯
 - (1) 令和2年8月下旬、庄内地域のトルコギキョウ施設栽培において、下位～中位葉にかけて黒～灰褐色のすす状の病斑を示す株が確認された（写真1）。
 - (2) 発病葉及び分離菌株を横浜植物防疫所に同定依頼したところ、トルコギキョウ斑点病（*Pseudocercospora nepheloides*）であることが確認された。
 - (3) 本病は平成20年に福岡県で初確認され、現在まで20県で確認されている。東北地域では、平成30年に宮城県、福島県で報告されている。
- 5 本病の特徴
 - (1) はじめ下位葉に5～10mm程度の退緑斑紋（写真2）が発生し、後に葉表と葉裏に灰褐色～黒褐色のすす状の病斑（写真3）を形成する。病斑上には、小黒点（分生子座）（写真4）が多数形成され、顕微鏡で観察すると分生子（写真5）の形成が確認される。病斑は下位葉を中心に発生するが、蔓延すると上位葉へと伸展する。
 - (2) ほぼ年間を通して育苗中及び本圃で発生する。特に春から秋の多湿条件下で多発する。
 - (3) 葉の初期病斑は淡い退緑斑紋で、秋季に気温が低下するとすす状の病斑を形成する。
 - (4) 現在確認されている宿主植物は、トルコギキョウのみである。
- 6 病原菌の特徴
 - (1) 糸状菌の一種で不完全菌類に属する。分生子座は濃褐色で葉の表裏に形成される。分生子柄は淡オリーブ色～褐色、シンポジオ型に分生子を形成しジグザグ状に伸長する（写真6）。分生子は単生し、無色～淡オリーブ色、頂部は丸く、基部は裁断状で分離痕は肥厚しない。形や大きさは変異に富むが、概ね円筒形～倒棍棒状で、0～7個の隔壁を有し、大きさは22.2～51.0×3.1～5.0μmである。
 - (2) 生態や伝染環についての詳細は不明であるが、病斑上に形成される分生子により伝染する。
- 7 防除対策
 - (1) 多湿条件下で発生が助長されるため、施設内の通風及び換気に努める。
 - (2) 発病葉は見つけ次第速やかに取除き適切に処分するとともに、薬剤防除を行う。
 - (3) 罹病株の残渣は伝染源となるため、施設外に持ち出し適切に処分する。



写真1 圃場での発生状況

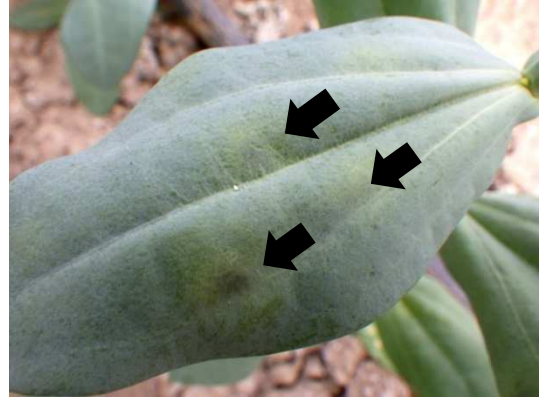


写真2 初期病斑（退緑斑紋）

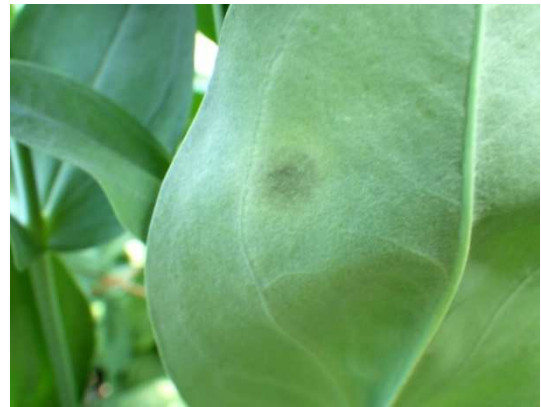


写真3 すず状病斑（上：葉表、下：葉裏）



写真4 病斑部の拡大（分生子座）



写真5 病斑上の分生子

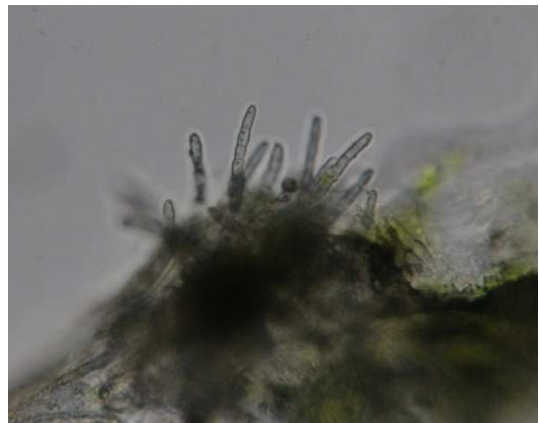


写真6 分生子座断面
(子座上に分生子柄を叢生)